

---

# 誰も知らない物語

Chereen

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

誰も知らない物語

### 【Nコード】

N6732X

### 【作者名】

Cherreen

### 【あらすじ】

人には、好きな人がいる。教師でも不倫でも子供でもない、普通の男の子。でもその相手に想いを告げられない理由があつて……。普通の女の子の普通の恋の話。真面目で、臆病で、がんばりや。どこにでもいる女の子の精一杯の恋。誰もが知っていて、誰もが知らない、自分だけの物語。

## 人物紹介

<男子バスケットボール部>

西本 都 (ニシモト ミヤコ)

主人公。高校生。男バスのマネージャー。

ミニバス 中学とバスケットをやっていたが、ケガにより高校でのプレイは断念。

成績は良い。160cmないくらい。顔は十人並みってやつだと思っっている。

同級生男子からは西本、女子からは都、先輩にはみやちゃんと呼ばれる。

東 哲弥 (アズマ テツヤ)

都の想い人。高校生。

バスケットを始めたのは中学から。弱小だったのであまり上手くない。

努力家。何でも真剣に考えたりする。責任感が強い。

167cmくらい。あまり目立つことをせず、埋没してしまうタイプ。

あだ名はテツ。たまにふざけてあずにゃんと呼ばれてたりもする。

北川 祐司 (キタガワ ユウジ)

都とクラスが一緒。部員の中では一番仲が良いといえる。

調子が良く、何でも中心になるタイプ。目立つ。

180cmくらい。運動神経も顔もいいのでモテる。

部員は基本的に名前呼び。他は北川君とか北川とか。

高田 浩貴 (タカダ ヒロタカ)

文系男子。怠け者。だけど上手く立ち回る憎めない奴。  
みんなに苗字で呼ばれる珍しい奴。彼女持ち。

松山 信大 (マツヤマ ノブヒロ)  
バスケットが上手い。部で1・2を争うくらい。シューティングガード。  
ド。

175cmくらい。部員からはノブと呼ばれている。

澤 崇史 (サワ タカフミ)  
1つ上の先輩。部長。穏やかな物腰。自然に部員をまとめている。  
ガード。

太田 渉 (オオタ ワタル)  
1つ上の先輩。都はよくからかわれる。話しやすいので割と仲良くしている。

<同級生たち>

鈴木 未緒 (スズキ ミオ)  
都の友人。中学校からの仲。家族ぐるみで仲がいい。  
都の性格など把握している良い理解者、候補。

飯島 千裕 (イイジマ チヒロ)  
都の友人。のんびりしている。

大谷 早紀 (オオタニ サキ)  
都の友人。彼氏持ち。サバサバしている。

三上さん

河野さん

長澤さん

よくある3人組。

強い、燃えるような目。

その目を見た瞬間、気づいてしまった。

私は、彼が、好きだ。

\*\*\*\*\*

授業終了の鐘が鳴った。やけに長く感じたな、と思いながら都は思いつきり伸びをした。疲れたねー、などと言い合いながら皆と同じように帰り支度をしつつ、都の意識はある一人の男に向けられていた。都の想い人である、東 哲弥である。友人と共に教室を出ていくその背中を目で追う。ついにその背中が見えなくなつたとき、都はごく小さいため息をつき自分も教室を出て、ジャージに着替えるため更衣室に向かった。

30分後。都はバスケットボールが跳ねる音やバッシュがたてるキョッキュという音が響く体育館にいた。

(いつ聴いても落ち着くなあ、この音。)

その大好きな音をBGMに、せっせと働く。都は男子バスケット部のマネージャーである。現在マネージャーが一人しか居ない上に部員が非協力的なので、練習開始前の準備はほとんど全て都が行なっている状態なのだ。もう半年この状態だから慣れたといえば慣れたのだが、練習前の準備は意外とやることが一杯ある。それだけにこの時間何をするともなく雑談している部員を見ると少し腹が立つ。

「そこでダラダラしてるの！暇ならちょっとは手伝ってよ。」

「俺らこれからストレッチするから忙しいんだよ。」

声をかけてもこのザマである。そのくせストレッチを始める気配を見せない。最近は雑巾とモップの用意という最低限の仕事すら忘れていた奴が多い。先生に言っただけで注意してもらったほうがいいだろうか。真剣に考えながら水汲みに水呑場に行くと、そこには哲弥の姿があつた。彼もまたバスケット部員である。

「少しドキツとしたが平常心!と自分に言い聞かせて話しかけた。」

「テツ、また雑巾やってるの?今日は高田の番じゃない。ちゃんと言っただけで本人にやらせればいいのに。」

「・・・別に。大したことじゃないし。」

哲弥はそう言っただけで都と入れ違う形で水呑場を出ていった。彼は基本的に無口である。・・・というのが都の哲弥に対する最初の印象だったのだが、違った。どうやら彼は人と話すスピードが違うらしい。人より少しゆっくりなため、せつかちな人とはあまり話さない。彼のペースに合っている、もしくは合わせられる相手とは結構話しているようだ。それがこの秋から冬にかけて、教室でも部活でも彼を見つけていた都が導き出した結論である。

(少しだけだけど、話せた・・・!)

一人になった水呑場で、都は喜びを噛み締めていた。そんな哲弥と言葉を交わすのは結構勇気がいるのだけれど、それにしてもこんな些細なことでもこれだけ喜べるのは、片思いの七不思議の一つだな、と思う。

都が哲弥を好きになったのは、いや、好きだと気づいたのは、夏休みも終わり球技大会へ向けて活動を始める頃だった。

哲弥はカツコイイわけでも特別運動神経や頭がいいわけでもない、平々凡々な男である。20人ほど入った新入部員の中でも存在感が薄く、都ももしクラスが一緒でなかったらなかなか覚えられなかっただろう。そんな彼の存在が都の中で大きくなっていったのは夏休みからであった。

3年の先輩が引退して次の代が本格始動し、練習がキツくなっていくにつれ最初20人いた新入部員が次々と辞めていき、夏休みまでに残ったのは12人だった。

その残った12人の中で、というよりバスケ部全体の中で哲弥は明らかに能力が劣っていた。同じようなレベルやそれ以下の者が辞めていったため、ランをしてもゲームをしても一人取り残されるようになった。

誰もが、ああこいつももうすぐ辞めるかな、と思った。しかし哲弥は諦めなかった。ランで一人取り残されても最後まで走りきり、気の緩みがちなフットワークをはじめとする基礎練習にも真剣に取り組む、部内での評価を上げていった。変わらず能力的には下だったが、上の者が哲弥を見下すことはなく、逆に彼に刺激され以前より真面目に練習するようになった。

その一部始終を都はそばで見っていた。気づいていなかったけれど、好きになったのは多分、あの時。

夏休みが終わり学校が始まり、教室で哲弥とクラスの子が話していた。同じ委員の子だったので委員会の話だろう。それを見て都は、急に体が重たく感じられて机に突っ伏した。

（何だろう、すごく・・・モヤモヤ？ムカムカ？する。辛い。どうしたんだろう私。）

どうしたの？と周りの子に聞かれるも、答えることができない。自分でもわからないのだ。都は悶々とした気分をしばらく引きずることになった。

それから1週間ほど経ったある日。その日の部活もいつもと同じメニューで、都もいつもと同じ仕事をし、することがないときは何か起きてても対応できるように練習を見守る。いつものように・・・とコートを見回した都の目はすぐに哲弥を捉えた。そのことに都は気づき、驚いた。私はいつもテツ君を見ていたのか。

その日の練習後、哲弥と話す機会があった。彼の、いつもゴールへと熱い視線を送っている、何があっても諦めない強い目が自分を見ている。その事実には都の胸はどうしようもなく苦しくなった。そして、唐突に理解した。

そっか。私、テツ君のこと、いつの間にか好きになってたんだな。

解ってみれば簡単な話で、以前クラスの女子と哲哉が話しているのを見て辛くなったのは嫉妬・・・というやつなのだろう。これまで人並みに「好きな人」は居たのだが、嫉妬を覚えたことはなかった。なので気づけなかった。

その後、都が挙動不審になったことは言うまでもない。  
帰宅後も母親に怪訝そうな顔をされた。しかし、理由は言えない。  
心の中でだけ報告する。

（お母さん、私、好きな人ができました。）

## 1 (後書き)

初めて書く作品です。楽しんでもらえれば良いのですが。誤字脱字、文章がおかしいなど、気づかれたことがありましたらお教えていただければ幸いです。感想もお待ちしています。

高校1年の2月。

哲弥への気持ちを自覚した都だが、その後何かアクションを起こすことはしていないし、起こすつもりもなかった。振り向かせる自信がないこともあるが、何より哲弥はバスケット部員だ。部内恋愛禁止というルールもあるし、もしそのルールがなくても都自身の判断で告白はしないと確信できる。

同じ部の中でそういうことがあると、どうしても変な空気になる。上手くいっても上手くいかなくてもそれは同じことだ。哲弥がそういうことを言いふらす人間だとは思わないが、得てしてこの種のこととはどこからか話が広まるものだ。何が起こるかわからないので、都はこの気持ちを誰にも打ち明けていない。

「みーやこっ！今年のバレンタインはどうするの？作る？」

昼休み。中学からの友人の未緒が声をかけてきた。

「ん、作るよ。一応マネだし部員にはあげようと思って。あ、未緒の家の分も作るよ。」

「ほんとに？やったー嬉しい！都のお菓子美味しいんだよねえ。私今年はブラウニーがいいなあ。」

「馬鹿。部員何人いると思ってるの。そんなに作ってられないよ。ブラウニー作ったことないし。」

「そこをなんとか！」

「はいはい。わかりました。じゃあ部員分とは別に作るよ。」

ため息まじりに都が言う。未緒は言いだしたらきかないので早めに折れる方が楽だ。

「お、西本、俺らにチョコくれんの？それなら胃薬用意しておかないきゃなあ。な、テツ。」

そこへバスケット部員でクラスメイトの北川祐司が話に割り込んできた。彼だけでなく一緒にいた哲弥を巻き込んでの割り込みに心の準備が出来ていない都の心臓は大きく跳ねた。が、平静を装って言う。

「祐司、それはいらないうってこと？嫌々貰う必要はないよ、私も作る量減って楽になるし。」

「北川君残念だねー。都の作るチョコすごく美味しいんだよー。」

「ちょ、待てよ。そういう意味じゃないって。軽いジョークじゃん。」

私の冗談に未緒が乗る。付き合いが長いので彼女はこういう間合いをわかっている。思いがけない二人ががりの攻撃に祐司は本気で焦っているようなので許してやる。

「ま、いいけどね。胃薬とか言ったこと後悔させてやるから。他にもらうチョコより美味かったらホワイトデーに3倍返しね！」

「おー、望むところだ！あ、そのルール他の部員にも適用しねえ？

面白そうじゃん。」

「それ、楽しそうだね！都、いいじゃん、やってみれば？」

「よし、今日の部活で言ってみよーぜ！」

「・・・俺、バレンタインにチョコもらったこと、ない。多分、今年も。」

チョコレート勝負（仮）の話題で盛り上がっていると、今まで無言だった哲弥が口を開いた。

「あー、そーゆーこともあんのかあ。その場合は・・・普通にお返しでいんじゃない？西本、どう？」

どうもなにも、哲弥からお返しが貰えるのなら何でも大歓迎だ。

「え、あ、うん。そのへんは任せる。」

我ながら変な返事だとは思うが、催促するような形にたくない。・・・まあ3倍返し云々の時点で催促しているのだがそれは置いておく。部員全体の話にしたのは祐司だし！

「それにしても、北川君は他にもチョコ貰えるって自信、あるんだね！」

「ああ、俺いつも6つは貰えるんだ。」

未緒の言葉から話題は祐司のチョコ事情に変わっていく。祐司は

身長もあるし顔も悪くないからそれなりにモテるのだろう。それよりも私はまた黙り込んでしまったテツの方が気になった。チョコレート勝負（仮）が本当に実施されたらお返しを用意しなければならなくなる。彼はどう思っているのだろう。

その日の部活終わりのミーティングで祐司が提案したチョコレート勝負（仮）は思いの外好評で、実施されることになった。そしてこれは今回限りではなく今後も続き男子バスケットボール部の伝統になるのだが今の都にそれを知る術はない。

さて、作りますか！

数日後。都は自宅のキッチンでチョコづくりをしていた。

今年はその勝負があるので、チョコも100均のものではなくちよっと高いものを使う。こっちを甘く見ている部員ら、特に祐司をぎゃふんと言わせてやりたい。チョコづくりというとチョコを溶かして固めるだけと知っている人も多いが、結構手順が多くて大変なのだ。都はトリュフは何回か作ったことがあるため、手際よく作っていく。トリュフは一度冷蔵庫で冷やすため時間がかかるのでその間にブラウニーをつくる準備をする。

実は未緒にブラウニーを作る依頼をされてから、都には考えるところがあつた。やっぱり年頃の乙女としてはバレンタインに好きな人にチョコレートあげるのは夢のシチュエーションだ。“部員だから”という理由であげるとは出来るが皆と一緒にだし明らかに義理で味気ない。この気持ちを告白することは出来ないものの何かし

ら理由を付けて特別なチョコレートあげたい。だから“部活の皆勤賞”という理由で哲弥にブラウニーを渡すことにしたのだ。

（まあ、今どきバレンタインに本命チョコで告白、なんて漫画の中だけだけどね。）

未緒用のブラウニーは昨日もう作っている。未緒には悪いが練習台にさせてもらった。

（美味しいって思ってもらえますように・・・！）

そう祈りながら都は心をこめてトリュフとブラウニーを作った。ただし一番お金の掛かるラッピングは100均の徳用袋にビニタイと手抜きである。高校生の懐事情としては、それが精一杯なのである。

2月14日。勝負の日である。登校した時点で校内はやはりどこか浮き立った雰囲気か漂っていた。教室に入ると女子がいわゆる『友チョコ』を交換していた。都もそこは抜きなくスーパーで買った徳用チョコを配り、他の子から手作りだったり市販のだったりするチョコを貰う。こういう光景を見ると、バレンタインデーはもはや女子が男子にチョコをあげる日じゃなく女子同士のための日だなと思う。

「いやーん西本ったらモテモテ〜」

一通りやりとりが済んで席に着くと祐司が絡んできた。

「いいでしょ〜 20個は貰ったかなあ。祐司は？」

「バツ力だなあ。本命チョコ渡すのは下駄箱か昼休みか放課後って決まってるだろ。これからこれから。ところで西本のチョコは？」

「私のは部活終わってから渡すよ。いちいち配り歩くのも面倒だし。」

「そーかよ。ま、楽しみにしとくよ。胃薬も用意したし。ホラ。」

そう言って祐司はポケットから胃薬らしきものを取り出して左右に振った。

「クロス、お前絶対クロス！チョコに毒入れてやる！」

私が本気で苛々してきたのに気付いたのか祐司は笑ってその場から逃げた。そのまま今教室に入ってきた哲弥のもとに向かう。私について何か言ったのか、哲弥がこちらを一瞥する。ドキツとした。

哲也のために別に用意したブラウニー。今は部員用のトリュフと一緒に体育教官室の冷蔵庫に入っている。私は今日彼にあれを渡すことが出来るのだろうか？

その日、部活が終わるまでのことは正直上の空で何も覚えていない。ミーティングの最後にひとりひとりにチョコを手渡す。みんなありがとって言って受け取ってくれる。

最後に哲弥の番になった。ブラウニーも一緒に渡す。“皆勤賞”としてあげるならば今が一番自然だと考えてのことだ。

「はい。テツは入部してから一度も練習を休んでいないので、皆勤賞のプレゼント付きです。」

笑って渡す。正直上手く笑えてるか自信がないが、緊張していることが周りにバレてはいけない。手が震えそうになるのも抑えなければ。幸い周りは皆勤の事実には驚いて、ざわめいている。

「……………サンキユ。」

哲弥も驚いたのか、いつもよりも間をあけて返事をした。ホツとして顔が崩れそうになるがこらえて一歩下がる。とてもじゃないけど顔を直視することなど出来ず、表情が全くわからなかった。

「愛情こめて作ったので皆さん味わって食べてくださいね。感想よろしく。あ、あの勝負もお忘れなく！」

ニッコリ笑って言うと言つと皆それぞれの反応を示し、ごく平穩にその日の部活は終わった。

その夜。帰宅した私が色々な緊張から解き放たれてベッドに倒れ込み、マナーモードにしていた携帯を確認すると、何通かメールが来ていた。

Date: 2 / 14 19 : 53

From: 北川 祐司

Sub: 勝負

負けたぁー！！！！

西本、マジ、菓子づくり上手いな。

胃薬なんて言っただけ申し訳ありませんm( | | )m  
3倍返しさせていただきます。

祐司の敗北宣言を見て、少し気分が上昇した私は、適当に返信してそのまま次々とメールを見ていった。

Date: 2 / 14 20 : 40

From: 太田 渉

Subject: (no title)

みやちゃん、チョコありがとう！

とても美味しかったです。

彼女には負けるけどネ”

このメールを見たときのろけかつ！と思わず言っただけじゃない。思った私に罪はない・・・はずだ。

他にきていたメールも概ね評価が高いもので、嬉しくてすっかり疲れがとれてしまった。

お風呂に入ろうかな、と立ち上がったとき、携帯が新しいメールの着信を知らせた。

Date: 2 / 14 21 : 12

From: 東 哲弥

Subject: チョコとケーキ

うまかった。ありがとう。

私はたっぴり一分以上固まっていた・・・と思う。

他の誰より短い、たった二言のメール。それが信じられないほど嬉しくて、死んでしまうかと思った。

我にかえってすぐ、そのメールを保護する。その後もベッドに寝転んでそれを眺め続けた。気の利いた返信なんて、考えつかなく

た。30分ほど経ったあと、やっと「良かった。今日もお疲れ様でした。ゆっくり休んでね(^^)」と色気のない返事をした。

自分自身は、ゆっくり休める気がしなかった。

2・5(前書き)

ホワイトデーのお話。

3月14日。規模は小さいがバレンタインデーと同じくホワイトデーにも女子同士のやりとりというのがあって（これは都にも予想外だった）、朝はそのおこぼれを頂いた。昼休みには担任や教科担任に呼び出され、チョコレートやクッキーなどを手渡される。部員の分は元を取れると考えていなかったため、日頃お世話になっているお礼と称して、お返しをくれる可能性が高い教師に配っておいたのだ。取れるところから取る。戦う女子の戦略である。結果、昼休みの時点で都はホワイトデーの戦果に満足していた。

部活後のミーティング。円になっていた部員の中から出てきたのは澤先輩と祐司だった。

「俺たちで話し合って決めたんだ。全員で金出し合ってみやちゃんへのお返しを買うこと。“3倍返し”の奴は出す金3倍ってことにしてな。はいこれ、2年から。」

そんな展開になるとは。驚いた都だったが有難くそう言った澤先輩から受け取る。そのまま祐司からも渡される。ちよつと重い。

「これは俺ら1年からの。1年は3倍の奴多いんだぜ。」

祐司がニヤつと笑って言う。お前もだろ、と野次が飛ぶと、俺も俺も！と一気に騒ぎ出したので笑ってしまった。

「ありがとうございます。正直そんなに期待してなかったのですごく・・・嬉しいです！」

その言葉にまた場がざわめく。そこによく通る声が響く。

「喜んでもらえて良かった。中身は言わないけど、ぜひ使って。じやあ、今日はこれまで。」

そのまま最後の掛け声に持っていく。さすが澤先輩、スマートである。

期待以上の収穫があり、ホクホクとしていた都だが、あることを思い出す。バスケット部のホワイトデーがこんな風だとは思っていなかったため、哲弥に言ってしまったことを。

一昨日、最近気になっているアーティストのCDを哲弥が持っていると知って哲弥に「それがホワイトデーってことでは？から貸して」と頼んでしまったのである。どんな形でもいいから哲弥からホワイトデーのお返しが欲しくて予防線を張ってしまったのだ。

今思い出すとあの時哲弥は妙な顔をしていたのだが、そう頼むことで既にいっぱいだった都は気づくことができなかった。

余計なことをしてしまったと後悔しながら着替え、重くなった荷物を持って教室に向かう。いつもロッカーにジャージを仕舞いに教室に戻るため、コートも教室に置いたままなのだ。

暗い教室のドアを開けるとそこには哲弥がいた。ドキリとするが別に初めてのことではない。たまにコートを忘れて更衣室に行ってしまうことがあるのだ。今まで祐司にも、他の教室へ取りに戻ってきた部員にも会ったことがある。

「お疲れ〜。テツ、またコート忘れたの？」

自分のコートを着ながら話しかける。

「ああ・・・うん。」

その一言を発したあと、哲弥は黙り込んだ。彼はもうコートを着ているのに、教室から出ていく気配はない。静かな教室に、私の心臓の音だけが響いている・・・ような気がする。

「西本。」

突然、名前を呼ばれた。気持ちを落ち着けて振り向く。

「何？」

「これ。約束のCD。」

袋を差し出す、手袋をしていない右手。私は一瞬何もわからなくなつて、ただ、その右手を見つめた。男の人の、手。

コトリ、と音がした。私は我にかえつてありがとうと言って袋を受け取る。

「・・・それだけだから。じゃ、お疲れ。」

そう言つて哲弥は教室を出ていった。

私はその場にしばらく立ち尽くしていたが、警備員が見回りに来たのに気づき、急いで教室を出て階段を駆け降りる。暗くて良かった。

た。自分でも顔が真っ赤なのがある。

外に出ると、雪が降っていた。火照った顔に丁度良い寒さだった。これなら誰かに顔の赤さを指摘されても寒さのせいに来る。

帰り道、少し冷えた頭が気付いた。今日のHR後、哲弥はコートを着て教室を出たはずだ。いつも背中を見ているから分かる。

それって、CDを渡すために教室に来てくれたってこと？

顔が勝手に笑みの形をつくる。律儀な彼だから深い意味はないだろう。それでも、嬉しいものは嬉しいのだ。

走り出しそうになる身体を抑えつつ、雪の中、都は駅までの道を歩いた。

## 2・5（後書き）

ちなみに2年生からのプレゼントは定期入れとクッキーです。

1年生は細々としたもの。バスケットボールのストラップとかキーホルダーとか。文房具もあつたので部活用にします。色々入つたので重かつたのですね。

哲弥からのCD入り袋にはアメが入っていました。（コンビニで買える安いのに）都是これにまた悶えさせられました。しばらく食べずに飾ります。

春。私たちは2年に進級した。私は文系でテツは理系。もともと同じクラスになるはずもなかったのだが、せめて距離だけでも近くあつて欲しいと祈った甲斐もなく、私が1組、テツは8組になった。心中で大きなため息を吐く。仲のいい友達とも離れてしまったし、友人作りに難航しそうだ。

「よっ！今年もクラス一緒じゃん。よろしくな。」

声を掛けてきたのは祐司である。適当によろしくと返して少し話す。少数派の文系男子である祐司が同じクラスだった。来年は持ち上がりなのでこれでコイツとは3年間同じクラスということになる。男バスでもう一人の文系の高田はどうやら3組らしい。他の理系の部員たちは各クラスに2・3人ずつと上手くバラけている。ちなみに未緒は8組。テツと同じクラスだ。

新しいクラスでしばらく過ごし、私は早紀と千裕という友人を得た。まだお互いの間合いを測っている最中だが、これまでは順調な関係を保っている。部活は新入部員が入り、顔と名前を一致させるのに必死である。テツのことは今まで通り、何も変わらない。いや、会えるのが部活の時間だけになったことで部活中にテツを見てしまうことが多くなったかもしれない。

「新しいマネージャー、なかなか入らないな。」

部活中、部長の澤先輩が言った。そうなのだ。何人が見学に来たのだが、みんな一日で来なくなる。

「みやちゃんが厳しく言い過ぎてるんじゃないのか？」

からかうように言うのは渉先輩。まあ確かに仕事について大げさに言っているのは認める。

「でもだつてこの仕事、結構大変なんですよ。休みもないし、半端な気持ちじゃどうせすぐ辞めることになるんだから最初に覚悟して来てもらいたいです。前例もあるし……」

前例とは、私と一緒に入った子がたった2ヶ月で辞めてしまったことである。特に仲良くしていたわけではなかったが、相談もなしにメール一通でそれを伝えられ、急に取り残された私は呆然とした。

「あー……まあ、新しい子が入らなくて大変なのはみやちゃんだから、俺らは別にいいんだけどね。」

「えー、俺は可愛い子が入って欲しいよ。俺には癒やしが必要なんだ！」

「渉先輩、私にケンカ売ってるんですか……？」

そんなやりとりの後も何人が見学の子が来たので、少し優しく接してみたが、やはりみんな2回目は来ない。結局今年は新しいマネージャーは入らなかった。私は落胆すると同時に安堵もしていた。テツの近くに他の女の子を置きたくない。近くにいるときつとテツ

の良さに気づいてしまう。気づいたら好きになるに決まっている。新しいマネージャーを望む気持ちの裏にそんな考えがあったから。そんな自分が嫌になり都がため息をつく、祐司と哲弥が声をかけてきた。

「そんな落ち込むなって。ため息つくとき幸せ逃げるぞ？雑用くらい新入生にやらせればいいんだって。」

「……大変だったら俺らも手伝うよ。祐司、お前もだぞ。」

「え〜？俺も？なんで俺が。」

「当たり前だ。大体俺らは今まで西本に頼りすぎだったと俺は思う。これじゃあ下に示しが見つからない。」

思いがけず哲弥からのフォローが入り都は動揺した。その後「西本」と哲弥の口から自分の名前が出たことでも平静を保っていらなくなる。顔が熱くなっていくのを隠すように都は俯いた。

祐司はまだぐちぐち言っているがそれを哲弥が諫めている。この二人は正反対に見えて妙に仲が良い。祐司といえる時は哲弥の口数がいつもより多い気がする。

「……もと？西本？大丈夫？」

俯いたまま考え事をしていると、近くで低い声がした。更に顔が熱くなる。

「あ、ああ、うん、大丈夫だよ。なんか嬉しくて。二人とも、あり

がとう。」

動揺が隠しきれていない。今、私の顔は真っ赤になっていないだろうか。気づかれませんかように！そう願いながら笑顔を作ってお礼を言う。

「……いや、本来は当然のことだから。な、テツ。」

「……おう。」

何故か二人とも微妙に目線を逸らして言う。やっぱり真っ赤な変な顔をしてるんだろうか。というか祐司のセリフ、元々はテツが言ったことではなかったか。

「おし、じゃあ早速マネさんのお手伝いでもして帰りますか。」

「だな。」

そう言っ二人は私の作業を手伝いだす。私も慌てて作業に戻る。軽口を叩きながらだったが、やはり3人でやると作業が早い。あっという間にやることが終わった。

「二人のおかげで凄く早く終わったよ！ホントにありがとう！」

「どういたしまして。」

更衣室へ向いながら礼を言う都に裕司はごく普通に返す。対する哲弥は真剣な顔をして尋ねる。

「……これ、西本一人でやったら相当時間かかるだろ。もしかして今までずっとこうだった？」

「うん。まあ、もう慣れたし。別に、大したことじゃないから。下校時間にも間に合うし。」

「……祐司。」

哲弥が祐司に目配せをする。

「おう。……西本。もっと俺らのこと頼っていいんだぞ？」のくらのことでお前の負担が減るなら俺はいくらでも手伝うし。」

「……俺もだよ。きっと、他の皆だってそうだ。」

「うん……ありがと。辛いと思ったときは、ちゃんと言うよ。」

マネージャーをやって1年。初めて部員に気遣われた都の中ではいろんな感情が渦巻いていてなんだか泣きそうだった。少し涙声になっただけかもしれない。別れたあと、更衣室にたどり着いた都の両目からは、堪えきれなかった理由のわからない涙が溢れた。

その後、哲弥と祐司の二人は事あるごとに都を気遣ってくれるようになり、練習の帰りに駅まで3人で帰ることも多くなった。都としては、同じクラスだった1年のときよりも哲弥との距離が縮まった気がして嬉しかった。漏れなく祐司も付いてきたが、二人きりになつたら意識しすぎて話すどころじゃないので逆に有難いくらいだった。祐司なら意識することもなく気軽に話せるから。

だから、気にしていなかった。それが周りからどう見えるかなど。

「西本さんつてさ、北川君と仲いいよね。」

昼休み、いつもの調子で教室で祐司と話した後のことだった。クラスの子 確か三上さん、河野さん、永澤さんだと思っ に声をかけられた。何の用だろう。私は全く警戒していなかった。

「ああ、部活が一緒だからね。」

「昨日二人で帰ってるのを見たって子が居るんだけど。付き合ってるの?」

あまりに思いがけない言葉だったので呆気にとられて一瞬声を失った。

「いや、付き合っていないし。昨日だってもう一人一緒にいたし。そもそも部内恋愛禁止だし。」

ああ、つまりこの中の誰かが祐司のことが好きだったりするんだろ。そういえば祐司はそれなりにモテるんだ。私にとってはテツが一番だから忘れていた。

「即答出来ないところが怪しいわ。」

三上さんが言う。後ろ二人が部内恋愛禁止だから内緒にしてるんじゃない？と好き勝手なことを言う。内緒にしてたら一緒に帰ったりせんわ！

「いや・・・そんな・・・」

この人たちには何を言っても無駄なんだろうな、と思う。面倒なことに巻き込まれたなあ、とも。でも一応もう一度言っておく。

「とにかく、祐司とは付き合っていません。仲がいいのは否定しないけれどただの友人関係です。では。」

面倒なので席を立った。こういうとき同じクラスというのは厄介だ。逃げ場がない。だから未緒のところに行くことにした。テツに会えるかもという下心つきの選択だ。

「なんか、大変だね。」

さつき起きたことの一部始終を未緒に話した上での反応がこれだ。ちなみにテツは居なかった。バスケット部連中とどこかに消えたらしい。体育館でバスケットだろう。

「未緒・・・心が籠ってない。」

「あ、バレた？ね、でも実際のところどうなの？北川君と。」

「本当に何もありません。ただの友達。」

未緒までそんなことを・・・女子高生というのは本当にこういう話題に貪欲だ。

「じゃあさ、北川君にもし彼女が出来たらどう思う？」

祐司に彼女ができたなら。考えたことはなかったけれど、十分に有りうる話だ。ヤツは（忘れてたけど）モテる。祐司に彼女が出来たらきつと下校は彼女とするだろう。そうしたら残された私とテツは二人で帰る・・・訳がないな。ただでさえ二人だと間が持たないのに。うん、やっぱり今の状態を保つには、祐司には悪いが彼女が来ないに越したことはない。

「・・・困る・・・かな。」

私はたっぷり考えてそう答えた。困る。うん、そんな感じ。

それを聞いた未緒は真剣な顔で言った。

「それって、北川君が好きってことじゃないの？」

「はあ？どうしてそうなるの。意味わかんないんだけど。」

「だって、北川君に彼女できたら困るんでしょう？恋人が出来て欲しくないってつまり、好きってことじゃない。」

不覚にも、納得してしまった。テツの存在を無視すれば、そういう構図が出来上がるのだ。

「いや、でも、それは無いよ。絶対無い。」

「そう？まあ都がそう言うならいいんだけど・・・」

未緒はまだ納得してないようだったが、予鈴がなったので私は教室に戻った。

この後私は人が沢山いる教室でこんな話をしたことをひどく後悔することになった。

ある日の帰り道。いつものように3人で帰る。もはや定番メンバーだ。

今日一日、祐司の様子がおかしい。教室でもチラチラこちらを見るくせにいつもものように話しかけにこないし、後片付けの時も口数が少なかった。

駅までの道でもいつもは一番話している祐司が黙っているため会話がでない。その上何か言いたげな目でこちらを窺っているのだ。

「ゆうじが なかまに なりたそうに こちらをみている なかまに してあげますか？」

いつそ鬱陶しくなったので某ゲーム調でテツに言う。最近ではテツとも自然に話せるようになった・・・と思う。内心ではドキドキだけ。祐司が少しびくつとした。

「・・・いいえ。」

思わず嘔き出す。テツも祐司には容赦がない。

「なんだよそれ、ひどくね？なかまにいれてくれよ」

やっと祐司が口を開く。やだね。テツが声を出して笑う。

「ていうか祐司、言いたいことあるならちゃんと言ってくれない？何も言わずにジロジロ見られるのすごい気持ち悪い。」

直球勝負だ。私が切り出す。すると祐司は何故かポカンとした顔をして、口を開く。

「え、いや、あの、お前さ・・・」

そこで言い淀む。だから何？と促すと私の顔をまじまじと見て、変な顔をする。

「俺・・・いや、いいよ。それよりお前、そんな不細工な顔してたら男が逃げてくぞ。」

「失礼な！いいよ男なんて。うちの部員世話するので精一杯ですから。」

フン！と顔を背け、言葉とは裏腹に隣の哲弥を気にする。不細工な顔なんて、恋する乙女としては極力見せたくない。哲弥は何か考え込んでいるようだった。

それからは3人いつもの調子に戻って話し、いつも通り駅で解散

する。電車に乗った時点でやっと気づいた。結局最初の質問に答え  
てもらっていない。少し気になったが、まあ元に戻ったからいいか  
と深く考えることはしなかった。

「ねえ都。あんた北川のこと好きなんだって？」

昼ご飯の最中にそう切り出したのは早紀だった。

「水臭いなあ、言ってくれば良かったのに。」

千裕もまるでそれが揺るぎない真実であるかのように話した。

「・・・誰がそんなことを？」

怒鳴り散らしたいのを懸命に堪え、尋ねた。千裕が言うにはその  
時の私の背中には冷氣というか妖気というか・・・とにかく恐ろし  
いモノが漂っていたという。詳しく聞き出した私は啞然とした。あ  
れから何も音沙汰がないのをいいことにあの問題をずっと放ってお  
いた結果、学年の大半の女子と一部の男子の間で、私が祐司のこ  
とが好きだという噂が広まっていたようだ。

噂の内容をまとめるとこうなる。“1組の西本さんは可愛くもな  
いくせに北川君のことが好きだけど部活で禁止されているからとい  
って告白しない。そのくせ帰りは強引に一緒に帰る。西本さんが告  
白しないから北川君も断ることができなくて困っている。”どうし  
てそうなった。まんま面倒な女じゃないか。というか可愛くもない  
くせにして何だ。そりゃ私は可愛くないけどさ。可愛くなかったら  
好きになっちゃいけないのか。いや別に好きじゃないが。だんだん

怒りが湧いてくる。

「私、祐司のこと恋愛感情で好きとか、そういうの全くないから。せめて二人は分かかって。」

そう言うと二人は急いでコクコクと頷く。心外だ。恐怖政治みたいではないか。

ああ、あの日祐司の様子が変わったのはそれが理由か。多分誰かから聞いたのだろう。それは気まずい。あの態度にも納得だ。誤解、解いておかなくちゃ。

机の一点を睨み色々なことに考えを巡らせていた都だが、あるひとつの可能性に思い至ったとき、頭に上っていた血の気が一気に引いた。この噂をテツが聞いていたら。

かなりの時間下をむいたままの郁が怒っていると勘違いした千裕と早紀は、勘違いしてごめんねと言ってその場を離れたが、その時フリーズしていた都は気付くことは出来なかった。もし二人が都の顔をのぞき込んでいたら、とても怒っているとは思わなかっただろう。そのくらい、情けない顔をしていた。

結局、都は誤解を解くために努力することを諦めた。広まってしまったもの全て否定して回るのは骨が折れる。人の噂も七十五日というし、皆すぐ新しい話題に流されていくだろう。たまに直接尋ねてくる相手にはキツパリと否定しているし、千裕と早紀も否定してくれているようなので、まあそのうち収まるのではないかと思う。

残った問題は2つ。ひとつは哲弥の誤解をどう解くかということ。もうひとつはこのまま3人で帰ることを続けるかどうかということだ。

ひとつは案外簡単に解決した。いや、解決したと言うべきではない。都が考えて決めたことではないからだ。その後も当然のように待っていて二人に甘え、わざわざ断るのも変だし、哲弥と一緒にいられる時間を減らしたくないという自分の欲望にただ負けただけだったのだから。

この点については、今までと変わることなく。噂を助長することにもなりかねないとわかっていながら、都はそれを選んだ。

一方、哲弥の誤解を解くチャンスはなかなか訪れなかった。都が哲弥と話をするときは大体祐司と一緒にいた。さすがに祐司の前で話したい話ではない。

そんな状況に焦っていた時、祐司が風邪で学校を休んだ。その日も哲弥は最後の片付けを手伝ってくれていた。

二人きりだ、とかはしゃいでいる場合ではない。今しかチャンス

はない。都は作業したまま、何気ないふうを装い尋ねた。

「最近私に関する変な噂流れてるみたいなの。テツ、聞いたことがある？」

哲弥は少し考えて言いづらそうに口を開く。

「……祐司と関係ある？」

「それっ！違うから！全くのデマなの。テツだけには誤解されたくないから！」

即答する。勢い込みすぎたせいか、そうか、と頷きながらも哲弥が気持ち半歩下がった。それに気づき、都は冷静になる。ふと、あることに思い至り、更に尋ねる。

「ところでそれ、誰から聞いたの？」

最悪の状況であって欲しくない。都の願いもむなしく、迷いながらも哲弥の口が紡いだのは、その最悪の状況だった。

「あ……更衣室で、皆が話してるの、聞いた。」

「……」

言葉も出ない。まさか部員全員にそう思われているのだろうか。噂話に疎そうな哲弥が知っている時点で、その可能性は高い。自分で聞いておいてなんだが、聞かなければ良かったと都は思った。

「・・・俺、邪魔なのかと思ってたんだ。違うなら、良かったよ。」  
自分の判断を色々後悔していると、哲弥が言った。そんな風に思っていたなんて、気付かなかった。

「そんな、・・・」むしろテツが居なくちゃ意味がない、と言いそうになって堪えた。それでは告白しているのと一緒だ。代わりの言葉を探している間に、おうい、早くしろ、と声をかけられた。

「・・・やっぱ、二人だいつもより時間かかるな。急ごう。」

「・・・うん。」

その後は二人無言で作業を進めた。私の頭の中では色々なことがごちゃごちゃと絡まり合っていて、それら全てを整理するのは難しいように思えた。

「・・・今日俺、先に帰るな。」

更衣室への道のり。重い沈黙を破ったのは哲弥だったが、その言葉で私の気持ちはもっと重くなった。

「わかった。今日もありがとう。お疲れ様。」

そう言って別れ、一人階上に向かう。気持ちに比例して、足が重い。

やっぱり祐司がいないと、一緒になんて帰れないんだな。分かっていたことだが、直面してみると予想以上に辛い。階段を一段一段

登りながら、先ほどの会話を反芻する。そうして、気付く。足が止まる。

テツにだけは誤解されたくないから！

さっき自分はそう言った。それは、それだって、告白の言葉と同義である。あの時はとにかく誤解を解かなければと焦っていて注意していなかった。誤解が解けても本当の気持ちに気づかれては意味がない。彼は気づいただろうか。気づいて、それで、一緒にいたくなくて先に帰ると言ったのだろうか。

いつまでも立ち止まっではいられないと、ノロノロと足を動かす。考えれば考えるほど悪い方に思考が転がっていく。そうして更衣室にたどり着き、機械的に着替える。今日は待たせてるから急がなくなちゃ！とかいうのがないんだ。そう思ってまた悲しくなった。

久しぶりのひとりの帰り道。一人になったときにいつも聴いている哲弥から借りたアルバムも、今日は聴く気になれない。

何か気分を上げるような、楽しいこと、ないかな。都は思う。

恋は楽しいものだなんて、嘘だ。辛いことばかりだ。

## 6 (前書き)

今回はちょっと短いです。

翌日には、祐司の体調が戻ったらしく、またいつもの日常が戻った。男二人が何かを気にしている様子は、もうない。哲弥の態度も変わりないので、気づかなかったのだろう。気づかれなくなかったのだから良いことなのだが、全く気づかれなくなると、自分が少しも意識されてないことを思い知るようで、少し悲しい。

以前と変わったのは、祐司と話すたびに周りの部員たちの視線がうるさく感じるようになったことか。噂は着実に広まっているようだ。大して仲がいいわけでない人の中でどのような噂が流れていると気にしないが、部活の中でも同じように思われると、居心地が悪い。

しかし、高体連が近づくにつれ、そんな状況もすぐに気にならなくなつた。みんな最大の勝負どころに向け、一生懸命練習に取り組んでいる。自然、マネージャーの仕事も増える。誰も人の恋愛事情を気にかける時間などない。自分自身のことさえそうだ。部活のことだけ、考える日々。地区大会優勝という目標を、本気で目指すのだ。先生の指導も日に日に熱が籠るようになった。

帰宅してからも、マネージャーの都にはまだ非公式な仕事が残っている。必勝祈願のお守り作りである。どの部活のマネージャーもこの時期は皆これらを作るのに忙しい。去年は入ったばかりで何もせず当日にクッキーを作って持っていっただけの都は今年が初めてなので、無難に背番号と名前入りのバスケットボールのマスコットを作ることにした。

部活の最中に作業を進められたら楽なのだが、こういうのは秘密の作業と相場が決まっているらしく、家で作るしかない。部員全員分を一人で作るのには時間がかかる。それでも手は抜きたくないひと針ひと針丁寧縫う。最近では都は毎日2・3時間しか眠れていなかった。

土曜日の朝。都はその日も明け方まで作業をして少し寝てから学校へ向かった。今日と明日は練習後にたつぷりと作業の時間が取れる。このペースで行けば今週中になんとか終わりそうだな、と思う。

「都、おっはよー！」

突然後ろからアタックされた。少しふらつく。早紀の声だ。

「おはよ。今日テニス部も朝からなんだ。」

そう言って振り向く。すると早紀がギョツとした顔をする。

「都、顔やばいよ。昨日よりクマ酷くなってる。ちゃんと寝てる？」

そんなにやばいかな。私は顔に手をやる。

「作業大変なのはわかるけどさ、あんまり疲れた顔していると心配だよ。」

「うん・・・ありがと。」

その後は話題を変えて他愛のない話をしているうちに学校に着いた。テニス部は屋外のコートでの活動なので頑張っつね、と言いき早い早紀と別れ、そのまま体育館に向かうが、すれ違う人が皆変な顔をして行く。そこまで疲れた顔してるのかな。それにしても反応が酷すぎやしないか。

都は憤然としながらも、練習前の準備を始める。あらかた終わって一息ついたとき、今頃着いたのか祐司が声をかけてきた。

「はよーっす。．．．うわっ！いつにも増して不細工な面してんなあ。」

失礼な、と思うけれども反論する元気もない。

「うん．．．ちょっと寝不足で。疲れてるのかも。」

自覚すると、疲れが一気に体にのしかかってきた。やばい、と思った。体がふらついたが、ステージに寄りかかってなんとか堪える。大丈夫かという祐司の声が聞こえる。近くで座って靴紐を結んでいた渉先輩がこちらを見上げるのがわかった。バスケットボールの跳ねる音がガンガンと頭に響く。足に力を入れてしっかりと立ち、大丈夫だと答える。自分にも言い聞かせる。私は、大丈夫。

その後の練習中のことは、よく覚えていない。気付いたときにはいつの間にか練習も後片付けも終わっていた。いつもやっていることは、ボーっとしていても出来るものなのだ、と変に感心した。

（ああ、良かった。終わったんだ。）

体育館のステージの上に座り込む。気が緩んだその瞬間、意識が遠ざかった。

夢を、見た。

風邪をひくといつも見る夢。断片的にしか覚えていないけれど、最初はいい気分なのに後半になると何か暗いものに追われる夢。いつもの夢ならばそこで終わるのだが、今回は違った。逃げた先に見えた光。その光に飛び込む。すると、いい匂いがする暖かいものに包まれる。なんだか安心して、・・・その先はわからない。

\*\*\*\*\*

目を覚ますと、見慣れた自分の部屋にいた。しかも窓からは朝日が差している。

昨日、家に帰った記憶はない。実は今日が土曜日で、今までののは全部夢でしたとかいうオチだろうか。

都はたまにそういう変に鮮明な夢を見ることがあった。まあ普通でも夢とは大概にしてそんなものだが、起きるまで夢とは気づかない。無駄に背景や設定がしっかりしているのだ。

とりあえず携帯を見ようと枕元に手を伸ばしたが、あるはずのものがそこには無かった。寝起きの頭がますます混乱する。すると、ドアが開いて母が入ってきた。

「あら都、やっと起きたの。気分はどう？」

言っている意味がわからない。そのことに気付いたのか、母は続ける。

「あんだ、昨日学校で熱出して倒れたのよ。それから今までずーつと寝てたの。連絡もらっってお母さんびっくりしたわよ。」

「嘘っ！じゃあ今日日曜日っ！？」

ああどうしよう作業進めてない・・・というか今日の部活は？今何時だろう。色々なことが脳裏をよぎり、焦って立ち上がるうすとすると体がふらついた。

「あんだ昨日昼から何も食べてないんだからいきなり動こうつたって無理よ。今食べるもの持ってくるからこれで熱でも測ってなさい。」

母は机の上に置いてあった体温計を私に差し出して部屋を出ていく。ぼんやりとそれを見ていたがとりあえず母の言つとおりにな熱を測ることにした。

ピピッと検温終了の音がする。37.8度。微妙な温度である。

「何度だった？」

そこに母がお粥を持って来たので黙って体温計の表示を見せる。

「まだ熱下がってないね。今日は大人しくしてなさい。」

「え、でも部活・・・」

「あんだ馬鹿じゃないの。病人に来られてもあつちが迷惑よ。」

それからくどくどと説教が始まった。こうなったら黙って聞いている方が得策である。私はお粥に口を付けながら母の言葉を大人しく聞いていた。

「・・・それに都が昨日倒れたことは先生も知ってるから、あんたは身体を休めることを優先させればいいの。わかった？」

母の話が長すぎてその間にお粥を全て食べきってしまった。これだけ食欲あれば大丈夫か、と母は半ば呆れている。

「はい。先生が私を見つけてくれたのかな？」

何気なく聞くと母は面白そうな顔をした。

「連絡をくれたのは先生だけど、見つけてくれたのは部員の子らしいわよ?」

誰だろうと呑気に考えていた私は続く母の言葉に愕然とした。

「教官室まで運んできてくれたんだって。お姫様抱っこで。お母さんビックリしちゃった。今どきそんなことする子いるのねえ。」

恋愛フラグってヤツじゃない。そしてニヤニヤしながらそう言う。咄嗟に言葉が出ない。というか母よ、恋愛フラグなんて言葉をどこで学んだのだ。

「・・・その部員の名前、聞いた？」

知りたいけど知りたくない、そんな気持ちで聞くも、母はそこまでは聞いていないと言った。お姫様抱っこ云々まで聞いたなら聞いておいて欲しかった。

「あら、顔真つ赤よ。熱上がったんじゃない？」

半笑いの表情のまま母は言った。分かっているくせに。しかしこれ以上からかわれるのは御免だったので布団に潜り込んでこれ以上の話を拒否する姿勢を見せると、母はまだ笑いが残っている声でおやすみと言って部屋を出ていった。

母が出ていってからも私は布団から出なかった。頭の中では情報が渦巻いてぐちゃぐちゃである。恥ずかしさで死ねる、と思った。しばらくの間そうしていたが、ふと思いついて携帯を探すことにした。昨日意識がなくなった時のままならば部活用のスポーツバッグに入っているはずだ。幸いバッグは机の横にあった。下の階にあったらまた母の顔を見る羽目になるところだった。

バッグから携帯を取り出して開くとメールが数通と着信が一件来ていた。

着信の相手は未緒だった。未緒からはメールも一通来ている。どうやら“お母さんネットワーク”で今回のことを聞きつけて心配してくれたらしい。

メルマガを除いて、後のメールも私を心配するメールだった。早紀、渉先輩、ノブ、祐司、そしてテツからも来ていた。気分が少し上向いたが、これはバスケット部員全体に知れ渡っていると思っただろう。連絡事項以外でメールをしたことが無いノブからもメールが来ているのがその証拠である。

今は部活中だよな、と思いながらもそれぞれに返信する。例によってテツへの返信は文章を考えるのに時間がかかるので一番後にする。文章が出来上がっても送信ボタンを押すのに更に時間がかかる。たかがメールでこんなにも心臓に悪い思いをする相手はテツだけである。やっぱり好きなんだなあ。やっとのことで送信して思う。

この時の都の頭はメールの返信のことでいっぱい（現実逃避だったかもしれない）お姫様抱っこのことはすっかり忘れていて、この中の誰かがその相手かもしれないとは思いつけなかった。

次の日もその次の日も、熱は完全には下がらなかった。都はこの大事な時期に周りの人に風邪を移してはいけないと、学校を休まされた。今まで部活や学校を休んだことがなかった都はもう元気なのに、と落ち着かない気分だったが、もし自分が逆の立場だったら同じことを言うだろうなと思っ行って行きたい気持ちを一瞬我慢した。

学校や部活に行かないことでなくて良いこともあった。時間が有り余っていたおかげで必勝祈願のお守りづくりは順調に進み、全員分が完成したのである。都はその出来に満足し、これらを渡した時の皆の反応を想像して笑った。

水曜日。やっと熱が下がって学校に着いた私を迎えたのは、早紀と千裕の暖かい言葉と叱責だった。

「おはよう都、もう身体は大丈夫なの？」

「やっぱり無茶だったんだよ。今回のことに懲りたらもう睡眠時間削ってまで無理しないようにしなよ。」

私のために言ってくれてると思うと叱責の言葉に対しても顔が緩んでしまう。

「二人とも、心配かけてごめんね。もうここまで無理しないようにする。でも今回のことでかえって作業進んでさ、全部終わったんだよ。あ、写メったんだった。見る？」

「へー、良かったじゃん！見せて見せて！」

携帯を取り出して二人に画像を見せていると祐司がやってきた。

「西本。やっと復活したか。何やってんの？」

部員に見られてはいけないと慌てて携帯をしまう。あの噂が流れてから祐司は教室ではあまり近づいてこなかったから油断していた。

「ずっと休んじやってごめんね。私が休んでる間何かあった？」

何をやっているのかという質問には答えずに質問を返す。幸い気にしている様子はなかった。

「特に何もねえけど。でも西本が居ない間マネージャーの仕事どうするか問題になってさあ。今怪我してる奴もいねえだろ。1年は基本的に別メニューだし。ちょっとお前を手伝ってた俺とテツがやることになってちよつと大変だった。特に練習中『ドリンクないぞ、入れてこい』って言われたときはテメエが行けよって思ったな。」

「え、ホントに？ごめんそれは大変だったでしょ。何も二人だけに任せることないのにね。」

そんなことになっているとは思ってもいなかったので驚いた。何よりいつもの祐司ならメールでお前のせいで云々と言ってきそうなものなのに。そう言うときはムツとした顔をした。

「いくら俺でも病人を更に追い詰めるようなことは言わねえよ。ま、それに俺よりテツの方がずっと大変そうだったから、俺が偉そうに言うのも何か違うと思ったしな。」

何か違うと思ったそれをここで言うてしまうのはどうなのか。思うところはあったけれどそれは言わないでおいて素直にお礼を言うと祐司は満足そうに自分の席へと戻っていった。

「・・・都と北川ってほんと仲いいよねえ。私らが入る隙がないって感じでちよつと嫌だな。」

それまでずっと黙っていた早紀が口を開いた。千裕も横で頷いて

いる。

「そうでもないけど・・・祐司とは部活の話ばかりになっちゃうからね。二人放ったらかしになっちゃったね。ごめん！」

早紀の思ったことをちゃんと口に出す性格は好きだ。裏で何か言われているのではないかと不安にならなくていいし、こちらもちゃんと彼女に向き合うことが出来る。

「・・・ま、いいけどね。私らがそういう風を感じてるってことは頭に入れといてよ。」

意味ありげな顔をして早紀はそう言った。

「私たちだけの問題じゃなくて、都と北川君が仲良さそうに喋るところで嫌な感情持つ人も居るからねえ。三上サンとか。」

千裕も言う。のほほんとしているようで結構毒・・・ビシッと言う子なのだ。

いつの間に時間がたったのか、HR開始のチャイムが鳴った。都にとっては少し久しぶりの、退屈な半日の始まりを告げる音だった。

その日の放課後、体育館に行くと何人かが部員が大丈夫かと声をかけてきてくれた。自分で思っているよりも部員に心配されていた事実に関心喜びながら大丈夫だと返す。その声をかけてきた部員の

一人に、ノブがいた。メールをくれた一人でもある。ノブは2年で唯一のスターティングメンバーなので話すことが多い方だ。

「西本、もう大丈夫なのか？」

「うん。メール、ありがとね。ノブがそんなに心配してくれるなんて思わなかったよ。」

私は、ノブも他の部員たちと言うことは同じだろうと、完全に油断していた。

「そりゃあ、誰だってあんな姿見れば心配するだろ。」

思考が止まった。いや、逆に頭が高速回転していたのかもしれない。久しく思い出していなかった“お姫様抱っこ”という単語が頭に浮かんできた。

「・・・もしかして、私を見つけてくれたのって、ノブ？」

「ん？ああ、そうだけど。」

それじゃあお姫様（以下略）で運んでくれたのはノブか！何で今まで忘れてたんだろうお姫（略）のことを。思い出したくないことは忘れるという人間の特技か。というか何でこの人はこんなに平気な顔をしているんだろう。混乱した頭でも自分の顔が真っ赤になっ  
ていくのがわかる。

「あ・・・あの・・・ありがとう、見つけてくれて。」

「どういたしまして。今度ドリンク奢れよ。じゃ。」

それだけ言ってシューティングをしに行く背中を見送る。練習熱心な奴である。私への対応があっさりしすぎていて逆に惚れそうだ。惚れないけど。

それにしてもノブが相手か、おひ（ry）……。漫画だったら好きな人が相手とかなのになあ……。と現実でないからこそできる（実際にテツが相手だったらとても顔を合わせるどころではない。体重バレーバレーになるということだし。現実にはシビアで、気絶した人間はとても重いのだ。）夢想、いや妄想をしていた私は体育館に入ってきた哲弥を見つけた。ちよつと本人には言えない妄想をしていた身としては少し恥ずかしい。

哲弥は他の部員のように声をかけてくることは無かった。知らないうちに期待していたのか、そのことに少しショックを受ける。都の姿を認めたときに安堵の表情を浮かべたように見えたが、それは都が元気になったことに対してなのか、都がいることで今日からはマネージャーの仕事をしなくて済むからなのか。多分後者なのだろうな、と思う。声かけてくれなかったし。昨日までのお礼をちゃんと言おうと思っていたのだけれど、今は言う気分ではなくなった。

歸りに言おう。

無意識についていたため息。それを いや、ノブとの会話の時点からずっと都を見ていた視線があったことに、自分の気持ちで頭がいっぱいな都が気付くことはなかった。

## 8 (後書き)

作者が風邪ひきましたー。

9 (前書き)

今回も短いです。

最後の大会の1週間ほど前、必勝祈願のお守りを渡した。苦勞した甲斐があつて皆とても喜んでくれた。すぐバッグにつけた部員もいて、それを見て私は涙が出そうになるほど嬉しくなった。みんなの喜ぶ顔が今回の頑張りに対する何にも勝る報酬だと、そう思った。

最後の大会では、お守り効果があつてか（そう思いたい）、順調に勝ち上がった。

今までで一番じゃないかと思うほど調子が良く、スタメン唯一の2年生であるノブの3Pシュートもズバズバ決まり、後半はスタメンを温存することも出来た。

今回こそはいける、そういう気持ちがあつた。今まで負け越していたチームにも僅差ではあるが勝ち、準決勝まで進んだ。最低限ここで勝てば上の大会に出場できる、運命の試合。相手は強豪校だが、諦めている人間は居なかつた。“諦めたらそこで試合終了”なのだから。皆、燃えていた。

しかし現実には厳しかつた。全く太刀打ち出来なかつたわけではない。精一杯、戦つた。しかし経験値の差か、実力の差なのか、点差はじわじわと開いていった。最初に諦めたのは、多分先生だつた。相手がサブのメンバーに徐々に切り替えだすと、こちらもと少ない3年のベンチ入り選手に交代の指示を出したのだ。

残つたスタメンが澤先輩1人になつたとき、私は先生は勝つことを諦めたのだと確信した。そのとき交代してベンチに下がつた先輩の顔は、とても、とても悔しそつた。

終わってみれば、30点差以上ついていた。試合後の挨拶を終えた澤先輩の目には涙が浮かんでいた。いつもスマートなこの人の涙を見たのは初めてだった。そのまま、試合後のクールダウンに入る。これで引退となる3年生は、皆泣きながらストレッチをしていた。それを見て私は密かに先生を恨んだ。結果が同じ負けだったとしても、一生懸命最後まで戦った上での負けと、諦めて思い出作りのような試合になった負けでは、残る思いが全然違う。せめて、最後まで戦わせて欲しかった。そしてそう言うことの出来ない自分に無力感を抱いた。

その大会の後には中間テストがあったためそのまましばらく部活は休みになった。放課後に練習がないというのはなんだか変な気分である。十分に勉強する時間があつたはずの今回のテストは、いつもより、少し悪い結果になった。

テストが終わったあとは追い出し会があつた。午前中に3年生チーム対1・2年チームでゲームをして、午後にバーベキューをする。それから最後にこの代最後のミーティングをした。3年生ひとりひとりが後輩に向けてメッセージを残し、先生が3年生ひとりひとりに向けて言葉をかける。ここでも泣いてしまう先輩がいた。

最後に、澤先輩が立ち上がった。一通りの流れを済ませたあと、改めて口を開く。

「最後に、次の部長と副部長を発表する。」

うちの部長は指名で決まる。3年生と先生で話し合っただけで決めるらしい。2年生の間に緊張が走る。

「部長は、北川祐司。」場がざわつき、皆の目が祐司に向く。「副部長は、松山信大と東哲弥だ。しっかりやれよ、周りも支えてやるんだぞ。以上。」

澤先輩はそのまま座り込んだ。決定に至った説明はないらしい。そのまま2年代表として部長に指名された祐司が先輩方に向かった。たどたどしく話している。急なことだから仕方がないだろう。自分になるとは思っていなかったようだ。

予想外の結果で驚いたのは私も一緒だが、驚きが去ってみるとこれ以上の布陣はないように思えた。お調子者だが中心になりまとめるのは得意な祐司と、バスケットが好きで実力もあるノブ、実力は足りなくても誰よりも真面目に練習に取り組み、祐司を諫めることができるテツ。いいんじゃないか。

私は目を副部長に指名されたテツに向けた。いつもはミーティングの間話している人の目をじっとみて聞いている哲弥は、祐司の話の間じゅう、硬い顔をして俯いていた。

時は過ぎ、夏休みになった。夏休みは一年で一番忙しい期間だと私は思う。

うちの学校は進学校なので夏期講習があり、1時間あたりが普段の授業時間よりも長い。勿論そのあとには部活もあって、帰宅時間はいつもと変わらない。どこが休みだどこが、と抗議したくなる。

そんな夏期講習も昨日で終わり、やっと今日から夏休みらしい夏休みが始まるのだが、どちらにせよ遊ぶ時間はない。夏休みは試合ラッシュなのである。公式戦はないが、近隣の高校が集まって行うリーグ戦が何種類も開催され、うちの学校もそのいくつかのリーグ戦に参加することになっている。

そのリーグ戦が終わったら休む間もなく合宿に入るため、試合ラッシュ直前の今日は準備に右往左往することになる。こういうとき、マネージャー一人って辛いな、と思う。

裕司を部長とした新チームは思った以上に上手くいっている。先生と先輩方を見る目は正しかったのだろう。ひとつ気になるのは、テツの様子である。一見以前と変わらないように見えるのだが、副部長として扱われるとき、決まって顔を強ばらせるのだ。その反応は試合に向けてユニフォームの背番号を発表した時に顕著に表れた。テツの番号は5番。私がそう言った瞬間、彼は今までで一番苦しそうな顔を見せた。

話を聞きたいとは思うのだが、3年生が引退するまではお客様扱いだった1年生を正式に部員として扱うようになってからは練習後の片付けの手伝いも1年生の役割になり、残念ながらあのメンバーで帰ることがなくなったので、話すチャンスがなかなか掴めず悶々とした日々を送っているのだった。

個人的にはモヤモヤしたままで迎えたリーグ戦の結果はなんと優勝。強豪校が出ていなかったとはいえ中堅どころで1位というのはいい結果である。その次の少し規模が落ちたリーグ戦も優勝。予想以上の活躍に少し気分が上向いた。先生もご機嫌で、ご褒美にとアイスを奢ってくれた。

チーム全体がいい雰囲気のまま合宿に突入した。バスで3時間かけて合宿所に向かう。

「君たちが泊まるところの前の坂道をね、少し登ったら夜景が綺麗などころがあるんだよ。穴場なんだけどね、照明もほとんどなくて星も綺麗に見えるから行ってみるといいよ。」

いつも助手席に乗る先生が荷物運びのため別行動なので、バスの運転手さんの話し相手は自動的に私になった。色々なところに行っているだけあって、話のネタを沢山持っていた。

合宿所に着いてからは大忙しだった。部屋に荷物を運び込んだらすぐに体育館の掃除をしてお昼ご飯を食べる。ご飯や味噌汁をよそうために部員より早く食堂に行かなければならない。洗濯場所や製氷機の確認や昼からの練習の準備など、やることは沢山あった。

練習後は洗濯と夜ご飯の準備に追われて、バスの運転手さんの言葉など頭からとんでいた。

合宿2日目、少し余裕ができて自分の時間をつくることに成功した私は、運転手さんの言っていたことを思い出して昼休憩のときに一人で坂道を登ってみた。夜にいきなり行くより距離やかかる時間を分かっていたほうがいいと思ったのだ。

そこは、とても見晴らしのいい展望台だった。10分ほど歩いただろうか。元々田舎なのもあってか、その先に何もなければいいからなのか、気がなくて居心地がいい。いい場所を教えてもらった、時間があつたら今夜また来ようと私は上機嫌で合宿所に戻った。

その夜。上手く時間を作っていざ展望台に行かんとしていた私の目に、休憩室に一人でいるテツの姿が飛び込んできた。声をかけようか迷う。しばらく立ちすくんでいたが、結局これは二度とないチャンスだという気持ちが勝った。精一杯の勇気を振り絞って声をかけた。

「テツ！丁度良かった。今、暇？」

暇だけど、という答えが返ってくる。

「今から外出しようと思うんだけど、一緒に来てくれない？さすがにひとりじゃ怖いからさ、暗いし。・・・話したいこともあるし。」

出来るだけ軽い調子で言おうと努力したが、最後の方は声が震えてしまったかもしれない。どんな返答が返ってくるだろう。高校の合格発表の時よりも緊張した。全身が心臓になったかのようにドキ

ドキしている。

「……まあ、いいけど。他のヤツらは？」

「あんまり他の人の前でしたくない類の話……なんだけど。」

目を逸らしながら言った。やっぱり二人きりは嫌だろうか。死刑判決宣告目前の犯罪者のような気分だ。私は声をかけたことを後悔し始めた。

「……いいよ、じゃあ行こうか。」

たつぷり考えたあと、そう言って哲弥は立ち上がって玄関へ向かう。断られるとばかり思っていたので一瞬固まってしまったが、慌てて後を追いかける。

「……どこ、行くの？」

合宿所を出てすぐ、こっちだよ、と進行方向を指した私に彼は聞いてきた。

「えつとね、バスの運転手さんのおすすめスポット。どうせだから行ってみたいなって思ってた。」

もう既に昼間行ってきた事は言わずに話す。マネージャーとして話したいことがあるのは本当だが、綺麗であろう景色をテツと見たいという都個人の下心もあるからだ。

テツはふうん、とだけ言った。

その後しばらく、二人とも沈黙したまま坂道を歩いた。そういえば二人きりで歩くのはこれが初めてだと気づいて余計に緊張感が増した。しかしこのままでは誘った意味が半分しかない。思い切つて口を開く。

「あのね、テツに確かめたいことがあつて。」

哲弥は何も言わなかったが顔をこちらに向けた。続きを促されている気がしたので私の勘違いかもしれないけど、と前置きして言う。

「テツ、副部長の肩書き、重荷に思つてない？」

哲弥の足が止まった。それは一瞬のことでもたすぐゆっくり歩きだしたが、何も言わない。私はその動揺が答えだと思つた。

「……何で？」

「ややあつてようやくテツが口を開いた。私はここ最近思つていたことを全部ぶちまけた。」

「……だから、副部長つてというのが本当は嫌なんじゃないかなつて思つてさ。どう？」

「……副部長が嫌つてわけじゃないよ。ただ、俺……」

「そこまで言つて哲弥は口を噤んだ。しばらく待つてみたが続きの言葉が出てこない。」

「私、ここで聞いた話他の人に言つつもりないよ？」

そう言ってみた。それでも哲弥は下を向いたまま黙っている。前を向いた目が好きなのになあ、とこの状況にそぐわないことを考える。マナージャーモードだと強気になれる。

しばらくそのまま歩いた。無理に聞き出そうとは思っていない。だから、ポツリと呟いたその言葉を聞き逃すところだった。

「・・・俺、下手くそだから。俺より上手い奴の上に立っていいの  
かって思う。」

話し出すと吹っ切れたのか俯いたままポツリポツリと言葉を零す。

「・・・わからないんだ。何で俺なんか選ばれたのかって、いつも思ってる。祐司みたいにみんなを引く張ることもできないし、試合にも出られないのに、5番なんて若い番号なのが、すごい・・・嫌なんだ。他の学校じゃ、5番つけてるような奴は上手くて試合で活躍してると思うと尚更。」

テツの言っていることはわからないでもない。私も似たような思いを抱いたことがあるからだ。だけれども。

「私はね、人の上に立つ素質とバスケが上手いことは本来関係ないんじゃないかと思うんだ。高校野球なんかじゃキャプテンがスタメンじゃないことなんてよくある話だし。確かにテツはノブとかに比べればバスケが上手とは言えないけど、練習に取り組む姿勢に関しては部活の誰にも負けてないと思うの。そういうテツの姿を見て、練習の取り組み方を見直す人って多いんだよ。そういう意味で、テツは十分みんなを引く張ってる。祐司に言われてもお前が言うなって納得できないことでも、テツに言われたら従わざるを得ないって言ってる人沢山いるもん。」

テツがあんまりにも自分を卑下するから、思わず熱く語ってしまった。自分の好きな人のことを悪くいう言葉など、たとえ本人の口からでも、聞きたくない。

「5番っていう番号がテツにいったのは、上手い下手じゃなくてどれだけ練習を頑張ってるかを評価しているんだっていう先生から部員へのメッセージだからね。それが嫌だって言うなら先生に言えばきつと変えてもらえるよ。その代わり番号もらえなくなるかもしれないけど。」

少し厳しいかもしれないが言わなければならぬことだと思ったのではつきり言った。その間テツは何も言わなかった。

目的地が見えてきた。重い空気であそこに行くのは嫌だったので、明るい声で言う。

「ま、結局は、テツが無理してるんじゃないかって私が心配だっただけなんだけどね。人に話すだけで気分が変わることってあるからさ。」

そう言うと、やっとテツは顔をあげてこっちを見た。

「何かあったらいつでも話聞くから。そのためのマネージャーなんだし！わ、すごい、キレー！」

最後は冗談っぽく言った、つもりである。展望台に着いたので私はテツから離れ夜景を見てはしゃいでみせた。実際、綺麗だった。テツはあまり興味がないようだったが。

「西本。」

ずっと無言だった哲弥が後ろから声をかけてきた。

「何？」

「……ありがとな。」

振り向いて見たテツは微笑んでいた。初めて見る表情だった。

「別に。大したことじゃないよ。」

顔が赤くなりそうなのを隠そうとまた夜景の方を向く。さっきの何十倍も綺麗に見えた。この美しさを私は一生忘れないだろうと思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6732x/>

---

誰も知らない物語

2011年11月11日02時47分発行